

も二年半はどうか炭坑作業をしてきたが、いよいよ栄養失調でOKとなり寝ていたが、ちょうどダモイ検査があり、帰されることとなる。このラーゲルでは一番初めのダモイとなる。

皆に別れを告げ、長い間の夢がかない、五月中旬ひよろひよろの体で念願の母国の土を踏むことができて、感無量であった。

戦後五十余年を過ぎ、記憶もうすれ、思うよう記すこともできないが、懐かしい軍隊生活、また苦しい抑留生活の一端、乱筆乱文にて記しました。

【執筆者の紹介】

大正十三年一月七日、飯島町に生まれる。家族は祖父母、両親、兄弟五人（男二人、女三人）

飯島小学校高等科を卒業

青年学校二年を卒業

職業は農業で、リンゴ、ナシ、水稻を主とする

昭和十八年徴集兵

昭和十九年一月十日 東部第三十八連隊入隊

〃 一月二十三日 高崎を出勤

〃 一月二十五日 博多港出航、同日釜山

港上陸

朝鮮―満州―北支へ

北支派遣軍陣第四二八六部隊（独立歩兵第二五大隊）機関銃中隊森隊に入隊

北支を転戦満州へ、これよりシベリア・チェレンホーボーへ

帰国後は自家で農業に働く

（長野県 長田 伊三男）

抑留記

岐阜県 永治 正

シベリアの中央部に日本の内地がすっぽりと入るほどに大きいバイカル湖という湖があります。その湖のほとりにイルクーツクという都市があ

り、そこからシベリア鉄道に乗り東へ向かって一日走ると、チタという所があります。そのチタの町へ、平成二（一九九〇）年八月、平成三年七月と、二度にわたり行ってきました。なぜならば、そのチタ市の近くのシベリア鉄道沿いに「ヤブロノバヤ」という小さな寒村があり、私が戦後の三年間捕虜として強制労働に従事した収容所がありました。そこで多くの戦友が過労と栄養失調、発疹チフス等で亡くなっております。その霊を弔うために蛭川村一之瀬の田口石材で作成した、黒御影石の慰霊碑を持参して訪し、シベリア鉄道の見える旧収容所跡地の丘の上に建立し、慰霊祭を行ってまいりました。

昭和二十（一九四五）年八月九日、敗戦の色濃くなった満州（現在は中国東北地方）へ、ソ連は不可侵条約を一方的に破棄し侵略を始めました。

当時、私は、関東軍最後の現役兵として、昭和二十年三月十八日、大興安嶺の西側、満州里、ハ

イラルの中間、免渡河というところに駐屯していた、百十九師団歩兵第二百五十四連隊（通称四百八十一部隊）六中隊に入隊し、新兵教育を受け、三カ月後に幹部候補生となりました。そのとき、第二大隊機関銃中隊に今洞の鷺見篤三さんが訓練を受けておられたことを見ることがありました。

満州の関東軍は世界最強と言われていたが、太平洋戦争の戦況が悪化、急変したため、南方軍の増強として転用せられ、山下奉文將軍が関東軍を連れていき、途中で敵の潜水艦に撃沈せられ、目的地まで行き着かないうちに海の藻くずと消え去った部隊があると聞いています。

そのあとの補充部隊として私たちが入隊し、また在満の根こそぎ動員が行われ、兵力だけは充足されたが、訓練、装備は不良で、軍隊とは名ばかりであった。そんな弱兵ばかりで訓練を受けていたが、ソ連の侵略が予見せられたので、興安嶺に陣地を構築して、そこからソ連軍を満州に入れな

いように、ハイラル（五百十五部隊）や免渡河にいた部隊の本隊は興安嶺に後退し、陣地構築に従事していた。

そして私は甲種幹部候補生合格の内命を受け、内地の、豊橋にある、予備士官学校へ入校できると喜んでいたが、その次の日にソ連が参戦侵攻したために原隊に復帰し戦線に駆り出され、夢は絶たれてしまった。

ソ連の侵攻により、満州里、ハイラル方面の関東軍は後退を余儀なくされた。私たちはその後退する友軍を援護するため、長谷大尉を大隊長とする一個大隊約二百人の部隊となり、牙克石（ヤクシ）に前進し、トーチカに入り、友軍の後退を援護することとなった。トーチカの銃目から下の道路を見ると、もうもうと砂塵をあげて戦車や兵員を満載したソ連の部隊が前進するのがよく見えた。十分な火砲も兵器もない。少しばかりの装備の貧弱な部隊では戦闘する能力もないし、戦意もない。友軍は戦線を捨てて敗走するし、山の上

からソ連軍の進撃する様子を眺めて見ているだけであった。

八月十五日払暁、真つ黒やみの中を陣地を放棄し後退したが、ソ軍に遭遇し、マンドリンという機関銃で後ろから撃たれた。敗走する兵隊は鉄帽をかぶり直し、前を逃げる戦友に遅れないようにと一心に逃げた。精強とうたわれた関東軍も、戦意を喪失した軍隊はもういものである。一発の弾丸もよう撃たず、夜が白々と明け、ソ連の戦車に追われ、部隊は散り散りとなり落後兵は増大し全滅しうになつた。そのとき私は落後兵となり最後尾となつた。ソ連の戦車は後方千メートルくらいに迫っていました。大隊長が心配して迎えにきてくれた。落後した五、六人の弱兵は尻びんたを取られ、のろのろと本隊を追及した。本隊は戦車の登れない岩山に布陣して決戦に備えた。ようやくにして本隊のいる岩山に到着した、戦友は心配して待っていた。しかしそれ以上ソ連の戦車は追

撃してこなくなり、我が部隊は全滅を免れることができた。これは当日が終戦の日であり、戦闘停止の命令がソ連軍に伝達せられたかもしれないと後から思った。

この岩山で私は過労で前後も知らず寝てしまった。夕方目を覚ますと本隊はいない。付近には二、三人の落後兵がいた。この戦友と本隊の足跡をたどり追及した。暗くなり本隊が大休止し、野営をしているところに追いつくことができた。

命からがら逃げる我々には終戦の命令など届くはずはない。鉄道線路や道路沿いに出るとソ連の捕虜となる。友軍はもういない。どんどん逃げて興安嶺の山中深く入り込み、関特演（関東軍特別大演習、昭和十六年当時、シベリアに侵入目的で満州全土に兵力を充実したこと）当時興安嶺山中に構築した陣地を頼りに、そこに備蓄してあった食糧を食い、また友軍がソ連に追われ、あわてて撤退した兵舎を訪ね、一カ月も出てこなかった。

ソ軍にじゅうりんせられた陣地には、友軍の死体

も放棄せられ、軍馬の死体もあった。その軍馬の死体から肉をそぎ落とし飯ごうで煮て食ってしまった。

それで私らの部隊は全滅したとうわさが飛んでいたそうであった。

終戦を知ったのは興安嶺山中であった。武装解除をして山中より出て集結せよと連絡があったそうであるが、兵士には真相を知らされていない。

武器弾薬を興安嶺山中に放棄し、自決用の手榴弾一発だけを持たされ、興安嶺山中をさまよった。

この当時はまだ軍隊組織精神が確立しており、生きて虜囚の辱めを受けずと、落後して捕虜にならば自決用の手榴弾で自決すべしといわれていた。しかし終戦を知った今、何としても生きなければならぬと、自決用に渡された手榴弾を河の中へぶち込み爆発させて魚とりに使ってしまった。

興安嶺の頂上を突破し最初の蒙古人部落へ到着

したとき、戦友の幹部候補生の一人が疲労と衰弱のためもう動けなくなってしまう。しかたなくこの部落に残留させることとなったが、生きて虜囚の辱めを受けずと自決したか、そのまま蒙古人部落に生きているか、その後の生死のほどは不明である。

興安嶺山中より北満の平原に出てきた。満人部落へ行くと既に終戦を知っていて、食糧を分けてくれない。トウモロコシ畑へ入り、トウモロコシをかつばらう。昼間行動するとソ連軍に発見されるといので、干し草の山の中に隠れ、夕方出て、東へ向かってとぼとぼと歩く。長い長い敗残兵の列が続く。一人、二人と落後する。たちまち満人の集団に襲われる。長い柄のついた草刈りがまで襲われる。被服装具を投げ捨てる、満人がそれを奪い合う。その間に命がけて本隊を追及する。落後して一人になればもう命がない。疲労こんばいその極とはそのことであろう。チチハルで

生活していた年をとった召集兵がいた。家族の安否を気遣っていた。情報は良くない。チチハルの近郊へ来た。

満州の奥地から逃げてきたという開拓団の集団にあう。女、子供、年寄りばかり、若い人は召集で軍に取られてしまつて、どうしてよいか分らない。真つ黒な顔をし、兵隊さん助けてくれという。こちらもふらふらである。悲惨というにはあまりにも惨めである。こうして関東軍は邦人を見殺しにしたのである。彼らは無事帰れたのだろうか。

チチハル市近郊でソ連の捕虜となり兵營に収容された。日本内地にどうしたら帰ることができるか一生懸命に考えた。しかし北満からどうして帰れるか、歩くにしても余りにも遠い、鉄道はソ連に接収されている。

帰国の方策として、南満州はチフス、赤痢等悪疫が流行し南方の大連、旅順からの帰国が困難で

あるとの話があり、ソ連がシベリア鉄道でウラジオストック経由で帰国させてくれるのだと喜んで丸太で作った二段ベッドの貨車に乗り、北の方へ向かって輸送された。チチハル編成第十三作業大隊であった。軍用列車はハイラル、満州里を通りシベリア鉄道に入り北上する。そのうち列車は東へ向かって走るはずだがいつまでたつても西を向いて走るのみであった。そこで初めてだまされたと気がつくのであった。日本人はよほどお人よしであつたらうか。私たち捕虜を満載した列車が到着した所が当初に書いた「ヤブロノバヤ」という駅であつた。ここからシベリアにおける捕虜生活が始まるのである。

ヤブロノバヤの駅に降ろされたのは十一月初旬であつたと思う。そこから徒歩で十四、五キロ山中に入ると既に先遣隊が兵舎を作つていた。ここが犠牲者が一番多く出たサハリンという所であつた。私はここへ到着すると直ぐに炊事係を命ぜられ、正月まで勤務した。すると炊事係は食事

をたらふく食うからという理由で交代すべしという声が出て交代を余儀なくされた。

このサハリンの捕虜収容所に和田の藤井市蔵さんという人がおられた。彼は馬を扱う兵隊で、それを引いて毎日ヤブの町まで糧秣受領に出していた。彼は他の兵隊から、時計や万年筆を出して、これをパンと交換してくれと頼まれ飛脚の役目もしていた。それで交換物資のパン等をピンはねし、けっこう裕福な暮らしをしていた。それで私も腹が減るので彼の所へ行きおこぼれをちようだいし蛭川の話をし、帰国する日を楽しみにしていた。

一月から伐採作業に回された。零下三〇度にもなる冬季の伐採作業はつらかつた。やったこともない丸太切りである、どうしてよいか分からない。二人一組で二人引きの鋸と斧でノルマを達成しなければならぬ、とうとう疲労と空腹で病人となつてしまった。

昭和二十一年の二、三月ころは一番犠牲者が出た。朝起きて見ると隣に寝ていた人が起きてこない、どうしたのかと顔に手を当てて見るともう冷たくなっている。顔も名前も知らない、どこの誰かわからない。作業に出ているうちにだれかが運んだのか、いなくなっていた。

四月ごろ駅のあるヤブの地へ病人として降ろされた。隊長は服部幸太郎氏（三重県菰野町出身）であり、貨車に丸太を積み込む作業隊であった。軍医に復員後恵那の保健所長をやられた末木光氏がおられた。やせてあばら骨がギリギリ、尻の肉はなし。ソ連の女軍医は兵隊の肉付きを見てバリノエ（病人）を診断するだけである。私は病気けはなかったので病院には入院する必要がなかった。幸運にも末木軍医大尉殿の将校当番になることができた。それからダモイ（帰還）まで本部付となり、ロシア語も覚え、被服係、糧秣受領係などで、重労働の貨車積みは特別なことを除きあま

りやらなくてもよかった。

また、兵隊の慰安のため劇団を作る話が出て、私も劇団員の一人としてサハリンや病院の慰問に行ったこともあった。一番最初にやった役は、菊池寛作「父帰る」の弟伸次の役であり、妹役は女形専門の飯盛君であった。鈴木与三郎という人が脚本を書かれたが、あの暗黒の生活の中でもよくも記憶を呼び起こして書かれたものであると感心するものである。

病院へ慰問に行ったとき和田の藤井市蔵さんが入院しておられ、一番前で私の演劇を見ておられたのが印象的であった。その後亡くなられたと聞いたが、兵士の身分では詳しいことは分からなかった。

軍隊は運隊ともいわれ、紙一重で運命の別れ目となる。九死に一生を得たのも、末木軍医大尉殿のおかげであると感謝申し上げます。

ダモイは昭和二十三年六月二十五日ナホトカを離れ、二十七日舞鶴港に上陸した。

ナホトカに集結し、何日かいた。民主主義にどれだけ洗脳されているかテストをされる。不十分な兵隊は再度奥地に返された。声を大にして天皇制打倒を叫ばなければいけない。死没者名簿など持ち帰ることは許されない。一切の装具は点検される、余分なものを持った者は直ちに奥地に返されるような、皆戦々恐々である。ここまで来て引揚船に乗れなかつたら、発狂してしまうに違いない。兵隊に入るときに精錬所の彼女のくれた御守りをナホトカの海に捨ててしまった。

私は旧制恵那中学校を卒業後、昭和十八年に奉天（瀋陽）の奉天精錬所に就職した。

昭和二十年ともなると会社にて若い者はほとんどいなくなった。皆兵隊に行ってしまった。私は大正十三（一九二四）年生まれ、昭和十九年に兵隊に行かなければならない年齢であった。同年の者

は皆兵隊に入っている。後から聞くと、会社の都合で若いもの数人は会社の必要要員として残すよう軍に申請が出してあったそうである。独身寮は男性が少なくなり、半分が女子寮となった。私の隣の隣から女子寮である。女子寮からは自由に男性の寮へ出入りができた。男子寮からは入れなかった。その隣の女性二人が私に御守りをくれた。一人は小さなモンペを履いた人形であり、もう一人はシジミ貝をきれいな布でくるんだ腰提げであった。兵隊の訓練中も、暗黒のシベリアの生活中も、肌身放さず大切にしていた。

ダモイ直前になつて、帰りたい一心でナホトカの海に捨ててしまった。一人の彼女は北海道に独身のままおられるとのこと、もう一人は博多市に同じ精錬所にいた人と終戦のとき奉天で結婚し、幸福な生活をしておられるとのこと、この大切にされた御守りを捨ててきたことを報告し、おわびをしなければならぬと思うが、いまだにできない。二人とは電話で話したのはあるが。

ダモイの船は信濃丸で、二千人が乗船した。

末木軍医大尉が梯团长となり、私は本部要員としてGHQへ提出するローマ字の乗船者の名簿の作成を命ぜられ日本海航海中作業に追われた。そのために、皆は船酔いに苦しめられたが、私は忙しさに紛れて船酔いはなかった。名簿を完成させてホッと一息したら、船は舞鶴の沖にいた。松の緑がまぶしかった。舞鶴に上陸し、日本の女性を初めて見た。何と美しい、天女が出迎えに出てくれていると思った。

帰国後はだれもが生活に追われシベリアのことなど思い出さなくもなかった。

戦後の復興も緒につき、昭和も五十年になり、作業隊の隊長をやっておられた服部さんが三重県菰野町に健在であり、土木建設会社の社長さん、また三重県議会の議長さんもやっておられるとのこと、ヤプロノバヤにいた者たちが隊長宅に集まり戦友会をやればという話が始まった。そしてお

互い連絡を取り合い八月十七日に十六人ばかりの戦友が集めた。

ここで戦友会を結成し、ヤブ服部隊戦友会と名前をつけ、揖斐郡神戸町の高橋惣衛さんを幹事長とし会の運営を図ることとなった。必然的に幹事長に近い岐阜県の者が幹事役となり、春日村の内保氏や私が補佐役となり、高橋さんを助けることとなった。その後毎年八月に湯の山温泉で戦友会を行い、三十人前後の戦友が集まることになった。

神戸町の高橋さんは文筆も達者であり、シベリアの思い出を残そうと『私のシベリヤ』という思い出の記を原稿用紙にたくさん書いておられた。平成元年四月になって、小生がこの高橋さんの思い出をワープロで打ち、それをそのまま本にしようと思いい立ち、四月三十日に原稿をもらいにいった。

それから一年『ヤブの夜は更けて』というタイ

トルドワープロを打ち、表紙や挿絵は箕面市の磯井徳三氏に頼み、それをそのまま印刷して発刊した。氏はヤブ劇団の主役で、最初にやった菊池寛原作の「父帰る」の兄さん役をやった人である。八百部印刷し、一部が八百円くらいになったと思う。費用は高橋さんが全額負担された。

この発刊について高橋さん方で竹内氏と度々打ち合わせをした。このとき、この本の発刊を記念してシベリアの旧収容所のあるヤブロンバヤへ行けばという話が出た。ちょうど藤橋村に最近シベリアへ行ってきた人があるという話を聞き、ここを訪ね指導を願った。早速返事があり、七月の終わりにシベリア行きの旅行団の募集をしているとのこと、すぐに申し込んだ。

ヤブ服部隊の戦友に墓参を呼びかけたが、なかなか集まらない。旅行社は十人以上ないと困るとの話、私の息子も参加してくれた。ヤブに関係のない人も加え十人の墓参団ができた。

当時はソ連の事情は全くわからない。ヤブへ行けるか行けないかもわからない。ペレストロイカは始まったばかりである。ままよ、行けるだけ行きましようという覚悟を決めて出発した。

通訳は東京外語ロシア語学科卒の大橋篤子さんという才媛であった。

平成二年七月二十八日、ソ連客船オリガザトフスカヤに乗船、新潟港出航。

日本海は穏やかであった。ソ連客船はなかなかサービスがよかった。航海中船員による民族舞踊、音楽、船内見学等退屈はしなかった。乗客全員は日本人である。他の乗客ともすぐに打ち解け、お互いに写真を撮り合ったりした。

初めはウラジオストクに入港するとの話であったが、乗船してみるとナホトカしか入港できないとのこと、早くもソ連にだまされたと思った。

翌日の夕方ナホトカに入港した。入国の手続に

大変手間がかかる。何時間も待たされてようやく上陸できた。上陸してみるとバスが待つていた。このバスでこれからウラジオストクのホテルまで行くという。

ダモイのとき、この港から復員船「信濃丸」に乗船したが、どこでどう乗船したか記憶が定かでない。一人一人ソ連軍将校に名前を呼ばれタラップを後ろも振り返らずに駆け足で駆け登り、船室に出航まで呼吸を殺して隠れるようにしていた記憶である。乗船する直前に返されたら大変である。

今までに警察、憲兵、特務機関等に勤務しておられた人が何人かダモイの貨車に乗る直前に、「ストイ（止まれ）、マワレミギ マエエ ススメ」とマンドリンを持った兵隊に連れられてどこかへ行ってしまったのを見ているからである。

窓ガラスにひびが入ったガタガタのバスであ

る。道路の舗装はしてあるが側溝もない、路面は凸凹だらけ、この道路をバスは全速力で走る。天井に頭をぶつつけるほどである。バスが幾ら走っても家は一軒もない。何時間走ったか、ウラジオストクの近郊で初めて家が見えた。ホテルに到着したのが真夜中であった。暗いウラジオの軍港には電灯で満艦飾の軍艦が見えた。今日は海軍記念日だとのことであった。

疲れて、入浴しようとしたら風呂の栓がない。しかたなくカメラのフィルム箱の靴下を巻きつけて風呂の栓とし、ようやく入浴できた。ソ連は十分なサービスを期待できないと聞いていたが、最初からこの調子ではどうなることかと心配になった。

翌日はウラジオストク港の観光、軍港であるためソ連の軍艦がたくさん見えた。ソ連人と一緒に観光船に乗る。半分は日本人である。すぐにロシア人とも仲良しになる。四十数年前のロシア語を思い出して話をする。身ぶり手ぶりで少しは意

味が通じただろうか。子供たちが日本人におねだりに来る。子供はどこも同じである。観光船の案内もロシア語と日本語で案内してくれた。

三十一日、キヨネール（青少年）キャンプを見学、ここは今年蛭川の小、中学生十人がキャンプに参加した所である。

八月一日、夜の十時ごろ、シベリア鉄道の寝台車に乗りハバロフスクへ向かう。シベリア鉄道は日本の新幹線よりまだ幅が広い。ホームが低いので乗車するとき何段も鉄の階段を上らなければならない。

ハバロフスクよりソ連アエロフロート機で空路チタに到着した。出発する前、チタとは少しも連絡がとれないと旅行社がいていたが、チタ空港に降りてみたら「日本」と日本語で書いた紙を持ち、おひげのロシア人が出迎えてくれた。これはありがたかった。この人はチタ市の赤十字の支部の担当者であるという。

チタ市郊外の日本人戦没者墓地を案内してくれた。三カ所に柵をして丁重に墓地が作られていた。そして墓所に番号が打ってあり、名簿もちゃんと作成してあった。これがゴルバチョフ氏が持参した名簿であった。しかし我々の目的はヤブロノバヤである。ヤブ以外の所は関係がない。ヤブへ案内してくれるよう頼んだが、なかなか承知をしてくれない。ソ連側も日本人の墓を大切に守っているからこれで我慢してくれという。とうとう私たちの堪忍袋の緒が切れて、シベリア鉄道沿いに歩いてでも行くとソ連側に迫った。ソ連側も仕方なく翌日シベリア鉄道で案内してくれることになった。

三日夜はチタ市長歓迎会に臨む。日本人として初めてのお客様だとのこと。市長、市役所の担当者、チタの赤十字の女支部長、おひげの赤十字次長等ウオツカを飲み、カチューシャの歌を唄い、親睦を深めた。市長に再度ヤブ行きを頼み、日本円三万円を贈呈し、日本人墓地の整備をお願いし

た。

翌四日シベリア鉄道のローカル線に乗車した。列車はのろい、腰掛は板張りである。ヤプロノバヤ山脈を列車はのろのろと進む。ようやくヤブの地を踏むことができた。

ヤブの収容所の裏山に戦友の遺骨を埋め大きな墓標を建てられた跡を探したがわからなかった。収容所の建物跡も十分には判明しなかった。ただペーチカの煉瓦と鉄板が建物の痕跡をとどめるのみであった。しかしヤブの地だけでも踏み、収容所の裏山も確認できれば目的達成と、わずか四時間だけでも許可された時間を有効に使い、病院跡地と思われる所も見て、帰国の列車に乗り、シベリア鉄道三日間の寝台車の人となった。

帰途はハバロフスク観光、アムール河遊覧と一応は満足して八月七日新潟空港にJALで帰国することができた。ハバロフスク空港でJALの日の丸を見たとき一同本当にホツとした。

帰国後ヤブ服部隊戦友会に墓参団の状況を報告した。すると来年も行きたいという人が大勢でき、第二次墓参団を募集することとなった。

黒の御影石で墓碑を作ることとなり、碑の文面は「ヤブ服部隊の戦友（とも）ここにねむる」とし、笠原さんに揮毫をお願いしたら新潟県燕市の市長さんが墓碑を書いてくださった。これのロシア語を通訳の大橋さんに訳してもらい、私のワープロからロシア語のアルファベットを出し、コピーで拡大し墓碑文面に入れて、一之瀬の田口石材に作らせ持参することとなった。

作業隊の副官で、ヤブの丘の上に戦友の遺骨を葬り、木の墓標を建てた笠原さんが、どうしても自分の目で確認したので行きたいからと、妹さんと娘さんと、その婿さんのNHKの笠井さんも同行された。笠井さんがビデオをたくさん撮影された。

平成三年七月八日、ソ連アエロフロート機で新

瀧空港出発。二時間でハバロフスク着。時差は一時間。

ハバロフスクより空路イルクーツク着。時差は二時間。夕方だがまだ太陽は高い。

イルクーツク観光、バイカル湖畔に食事に行く。日本人による日本料理店があった。ロシアの娘が日本の着物を着て出迎えてくれた、これにはびっくりした。こもかぶりの酒だるもある。すき焼き定食の日本料理であった。開店して二年ぐらいになるとのこと。若い日本人夫婦の経営で、主人が板前であるという。

七月十日、五時間も遅れたシベリア鉄道で翌日の夕方チタ着。十八キロもある墓碑を竹内氏と二人で提げ長い長いホームを歩いた。昨年世話してくれたチタの赤十字の係官が出迎えてくれた。驚いたことに湯沢温泉ロイヤルホテルのマイクパスが待っていてくれた。よく聞くと日本の中古車を買つてソ連の観光会社がそのまま使用している

とのことであった。

十二日、待望のヤブ行である。湯沢温泉のマイクロバスに乗車、ヤブを目ざす。

途中シベリア鉄道のガード下をくぐる。ガード下の道路は川となり全員下車、バスのみ通過、シベリア鉄道を徒歩で横切りバスに乗る。

ヤブの病院跡地へ先に行く。病院の責任者をしておられたという四国の山本さんがどんだん山の中を先に進む。道路から相当入った所に山火事で焼けた病院の跡地が発見できた。幸運であった。

ヤブへ到着。第二次墓参団に第一次墓参団の竹内、小嶋、永治の三人が再度参加していた。

笠原さんがヤブの丘のうへの墓碑を捜すがわからない。四十数年前の記憶をたどったが見つけることができない。

このあたりだったろうとシベリア鉄道の見える丘に場所を定め、土木建設会社の社長さんの竹内氏の設計で途中で手に入れたブロックを並べ、セメントを手でこね、皆でわいわいがやがやと基礎

を作り、持参した黒御影石の墓碑を建て慰霊祭を行うことができました。

ヤブロノバヤの村長という人も来られた。村人や子供たちも大勢来た。村長に日本円を贈り墓碑の保存をお願いしてきた。蛭川でできた石碑が遠い遠い北のシベリアの丘の上に立ち、遺骨も名簿も持ち帰ることが許されなかった戦友の霊を慰めることができた満足して帰国することができました。

帰途、チタ空港よりハバロフスク空港着。シベリア上空は飛べども飛べども大森林地帯。開発の日本の援助を待っているという。

ハバロフスクの日本料理店サツポロへ行く。昨年訪ソしたときに工事中であった。赤い煉瓦造り、三、四階建てくらいであった。昼敷であぐらをかき、掛軸あり、灯籠もあった。ロシアの娘さんが日本語で名前を書いた名札をつけサービスしてくれた。アルミ缶入りのサツポロビールがうまかった。刺身、天ぷら定食であった。毎日日本か

ら魚を空輸しているとのこと、握り鮓もあり少しも日本と変わりが無い。入ソする日本人は必ずここへ寄るだろう。ハバロフスクは日本との玄関口である。ホテル「インツォリスト」は日本人ばかりである。

入ソしたとき、ハバロフスクの博物館で鹿の角を買った。二百五十ルーブルであった。日本円に直すと千二百五十円である。立派な飾りものである。シベリア土産としていつまでも保存したい。

このホテルの一時預かりに保管してもらった。保管料が五日で五ルーブル、二十五円であった。

新潟県燕市の笠原さんの自宅に笠原さん自身で慰霊碑を作っておられます。ここでヤブに持って行ったと同じ墓碑を建て、八月二十六日、ヤブ服部隊戦友会多数の参列のもとに慰霊祭が行われ、第二次墓参団の帰国報告会が盛大に行われました。

これらの段取りも私がワープロを打ち資料を作りお手伝いすることができました。

これで私自身の戦後もようやく終わることができ、この稿を終わります。

【執筆者の紹介】

岐阜県恵那郡蛭川村

大正十三年九月九日生まれ

昭和十七年

旧制恵那中学校卒業

満州国奉天市満州鉱業開発株

式会社入社

昭和二十年三月

関東軍第百十九師団歩兵第二

百五十四連隊入隊

〃 七月

幹部候補生、上等兵

〃 八月

終戦

〃 九月

チチハルにて武装解除、ソ連

軍の指揮下に入る

〃 十一月

シベリア・ヤプロノバヤ第五

七作業隊にて抑留、作業始ま

昭和二十三年五月 帰国のためモノゾン駅出発

〃 六月 ナホトカ港出航、帰国

昭和三十七年 蛭川村役場吏員拜命

昭和四十四年 安弘見神社権禰宜に任ぜられる

平成元年

安弘見神社宮司及び白山、田

原、内理、奥渡各神社の宮司

に任ぜられ、同時に神社庁恵

那支部神職会長就任、現在に

至る。

全抑協恵那支部の役員として各種行事に積極的
に参加、県連として貴重な人材である。

(岐阜県 鈴木 善三)